

第 25 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会 学術大会

題名；結晶性油脂の不思議：錯覚としての冷覚刺激による嚥下運動への効果

氏名；○相澤知里¹⁾、岸本奈月¹⁾、竹井絵理²⁾、Kulvanich Sirima²⁾、井上誠²⁾、荒川亮³⁾
折原由希子³⁾

所属；¹⁾新潟大学歯学部歯学科、²⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科摂食嚥下リハビリテーション学分野、
³⁾日清オイリオグループ株式会社

【目的】結晶性油脂 ジュピター30（日清オイリオグループ株式会社）の融点は 29℃であり、その際の吸熱反応によって表面温度が下がることで冷感を感じるという。今回我々は、舌をターゲットとして、どの部位で冷感を最も感じやすいか、またその刺激により嚥下運動にどのような影響をもたらすかについて検討した。

【方法】対象は健常若年者 23 名（女性 12 名、平均年齢 25.8 歳）とした。舌を舌尖、舌中央部、奥舌部、舌縁に分けて、いずれかの部位にジュピター30 を 0.2 g または対象として容量を合わせた米粉を置いて、冷感を感じるまでの潜時、冷感の持続時間、冷感の程度、嚥下したくなる衝動の有無とその程度を比較した。次に、最も効果的であった部位（奥舌部）への投与により随意嚥下運動がどのように変化するかについて調べるために、油脂を奥舌部に置いた後に合図とともに随意嚥下を指示し、最初の嚥下までの時間（潜時）と 10 秒間の嚥下回数で評価した。さらにその効果が条件刺激である TRPM8 のアゴニストであるミントの刺激によってどのように変化するかについても調べた。

【結果ならびに考察】冷感に関する効果が潜時、持続時間、程度、嚥下したくなる衝動ともに最も高かったのは奥舌部であった。さらにこの部位への刺激により嚥下回数は増加し、ミントによる増強効果も認められた。冷蔵保存を必要としないジュピター30 の冷覚刺激による嚥下促進効果は、臨床応用への期待がもたれる。